

星はらはらと

第十三回

太田 治子



——二葉亭四迷の明治——

二葉亭四迷は、悩める人であると共に行動する人でもあった。それは、十代の辰之助のころからのものだった。明治十二（一八七九）年秋、当時通学していた高谷龍洲の漢学塾をやめたのも、その熱き血潮のせいだったと思われる。当時の学友であり後に朝日新聞記者となる土屋大夢は、二葉亭の没後まもない明治四十二（一九〇九）年五月十六日、東京朝日新聞に次のように書いている。「明治十一年五月十四日は大久保公が紀尾井坂にて刺客に殺されし日なるが其刺客の一人杉村文一と云へる少年

は當時余等の業を受つ、ありし東京芝愛宕町なる濟美齋の書生なりしかば翌十五日警官數名學校に闖入し來り……（中略）……其時新聞に出たる斬奸狀を筆寫したる塾生數名ありしが警官の來るを見て早くも計を廻らし村木某と言へる六尺有餘の大男をして斬奸狀を二階の天井の梁の上に隠さしめ何食ぬ顔にて詩など吟じ居りしかば警官も遂に之を發見すること無くして事濟みたり此時其斬奸狀を寫したるもの、中に長谷川辰之助君も交り居たる様記憶す……（中略）……長谷川氏は大人組にて余等

を子供視せり當時氏は文天祥正氣の歌雲井龍雄の詩などを喜び書が上手なれば休日には鐵漿にて唐紙に右等の詩を書し之に墨汁を瀉ぎかけて贖物の石摺を拵へ懸物として詠むるを得意とせり明治十二年米國のグラント將軍來京に際し東京府議會會長福地源一郎擅に府民の名を以て歡迎を爲したりとて沼間守一氏の打撃する所となり東京日々、朝野、曙、東京横濱毎日等の紙上辯難攻撃の花を咲かせし時高谷先生は福地の所爲非難すべき無しとて漢文にて一書を草し之を諸新聞に寄送し朝野新聞之を掲載せり長谷川君と西君なりしが之を見て不可とし先生に謁して議論を試みしに少年の癖に生意氣なりとて大に叱責せられ君等憤然として退塾せし様に記憶す」

年譜によると辰之助が濟美齋に在籍したのは、十二年の二月一日から十月三十日までである。大久保遭難の折りには、まだ入学していなかった。このような思い違いは、文中にもあるように彼が大人とみえていたからなのと違ひなかった。書も上手な一方では、歌舞伎の成田屋の声色を真似したり、漢詩を吟じたりすることもあったという。きっと落ち着いたよい声だったのだと思う。しかし、後年外交官の道を歩むことになる西源四郎と共に福地源一郎（桜痴）擁護はおかしいと高谷龍洲に立ち向

つた時には、いつもとは違ってその声はとびきり大きくドスがきいたものになっていたのでないか。前アメリカ大統領グラントの訪日に、日本中が興奮していた。そこでも目立とうとする福地に肩入れの姿勢をみせる先生は、こちらから願ひ下げだと、自由民権運動家の青年になった思いで大声を張り上げたような気がするのである。当時自由民権運動の政談演説会は、全国津々浦々に大きなうねりとなって広がりがつあった。信州松本の民権運動家松沢救策も、会場に婦人や子供の数がとても多いこととびっくりしていた。救策の祖母も、義太夫や浮かれ節よりも面白いといつて足繁く通っていたという。明治七年、板垣退助らが愛国公党を設立、「民撰議院設立建白書」を大久保利通に提出したところから自由民権運動が始まっていた。西南戦争で西郷隆盛が武力により力尽きた後の人々の希望の星は、全国の人民の力を結集して国会を開設しようと呼びかける板垣退助となった。板垣が演説会場に現れるかもしれないという噂がとびかうと、それだけでどの会場も超満員になったという。自由民権運動は、薩長が牛耳るところの時の政府へのアンチテーゼから始まっていた。

「政府の専制咎むべからずといえども、これを放頓すれ

おおた・はるこ●神奈川県生まれ。近著に『石の花 林芙美子の真実』『時こそ今は』（ともに筑摩書房）、『明るい方へ 父・太宰治と母・太田静子』『夢さめみれば 日本近代洋画の父・浅井忠』（ともに朝日新聞出版）など。